グレーゾーン

高崎市立寺尾中学校
三年　大山　来夢

世の中にはたくさんの障がいがありますが、みなさんは障がいについて、そしてそれらを取り巻く環境についてどれだけ知っていますか。中には「発達障がいのグレーゾーン」と呼ばれる人達もいます。発達障がいの特性はありますが、診断基準を満たさない人達のことです。

私の弟は、発達障がいの一つである自閉症という障がいをもって生まれてきました。弟は、こだわりの特性が強く、人と接することが苦手です。また、感覚過敏もあるため、服の着脱や、爪を切ることも苦手で、人と手をつなぐことさえ困難です。一緒に生活していると彼のこだわりや苦手なことを理解してあげられますが、見た目ではわからないと思います。

約二年前からコロナウイルスが流行し始め、今ではマスクの着用が当たり前になっています。しかし、弟は感覚過敏で、マスクの着用が困難です。そのため、周囲の人から白い目で見られることが多くあります。弟は自閉症の診断がついているので、「療育手帳」というものが発行されています。その手帳を見せることでほとんどの施設では証明として使用できます。ですが、グレーゾーンの人々は療育手帳が発行されません。だからその都度、口頭で説明しなくてはならないのです。日常生活で困りごとがあっても理解されにくかったり、支援されたりすることが難しい場面が多くあります。

以前、家族で遊園地に出かけたとき、「感覚過敏のためマスクが着用できない。」とスタッフの方に伝えたところ、「きまりなので入場できません。」の一点張りでした。弟には事前に遊園地に行くと伝えていたため、入場できないことでパニックを起こしました。泣き叫ぶ弟の姿を見て、私まで悲しい気持ちになりました。

「理由があって、マスクをつけられない方がきたらどうするのですか？」と母が尋ねると、「そう

いった方の入場はお断りしています。」と言われました。「マスクを着用できない人は悪なの？」私の心の中で大きな疑問が生まれました。もやもやとした気持ちを抱えたまま、他の遊園地へと向かいました。そこではスタッフの方に事情を説明すると専用のカードを作ってくださり、入場することができました。「マスクの着用ができません」と書かれたカードを身につけていることで弟だけでなく、他のお客様にも配慮してくれました。

この体験から、私はこのような施設がさらに増えていってほしいと強く思いました。また、いろいろと調べていくと、感覚過敏専用の意思表示カードやバッジなどが売られていることを知りました。このようなものが世の中に浸透していけば、遊園地や映画館などの公共施設もだれもが利用しやすくなるのではないかと思っています。

私はけっして弟のことを特別扱いしてほしいわけではありません。みんなそれぞれ得意なこと、苦手なことがあると思います。弟の場合、ほんの少し苦手なことが多いだけなのです。そこの「ほんの少し」の部分に目を向けてくれるだけで、共感してくれるだけで、発達障がいやグレーゾーンの人達は生活しやすくなると思います。そのためには学校で障がいに対する、より深い教育も必要なのではないでしょうか。

私も約束の時間を守れなかったり、忘れ物が多かったり、不用意な発言で友達を傷つけてしまったりと苦手なことがたくさんあります。そこも個性として認めてくれて、理解してくれる友達がいてくれるから、今こうして楽しい学校生活を送れています。

弟がこれから生活していく上で、辛いこともたくさんあると思います。でも、弟がくじけそうなときは、私がそばで支えてあげたいです。そして障がいをもって生まれたことを悲観せず、自分の生きる道を見つけてほしいと思います。私も障がいやグレーゾーンに対する知識を深め、みんなに広めていけるよう行動していきます。

最後に、私は強く願います。

すべての人が自分らしく堂々と自分の人生を生きていける社会の実現を。私と一緒にこの世界中に、心のバリアフリーを広げていきませんか。